

た人と見るべきであるが元來秀才の頭腦と云ふ物が私の頭程頑強に出来て居ない、それに其種の人に
 限て藝に對して驚く計りであり眞劍である、不斷落語とガツチリ四つに組で居る、勢ひ唯喋る丈けで
 は得心出来ず自分自身が落語の中に没入して仕舞ふ（これが本當の落語家の態度である事は私が度々
 力説した通りである。）無論高座へ上て演て居る僅の時間だけでなく日常生活が落語の權化となるので
 ある。

是になり切た人の例を私は二三ならず見て居るが實に尊い眞面目さであると思ふ、此様な生活が永
 年續けられる結果藝の世界と現實の世界との見境が曖昧になつて來る、天才に奇言奇行の多いのも夫
 れが爲だ遂には自分と云ふ物が生きて居るのやら落語が生きて動いて居るのやら解り兼ねる様になると
 最早其頭腦は慥とは云ひ難い、私に精神科學的素養があれば此間の經路をもつと委しく書き表す事が
 出来ると思ふ。

つゞまり餘りにも眞劍であり過ぎた爲の結果であると私は信じるのである、若しも左様であるなれ
 ば、此尊ぶべき殉職者に對して其病因を酒や品行に歸し、甚だしきは慢心の故と斷じて濟す事は申譯
 のない事ではなからうか敢て異説を立て、大方の御批判を希ふ次第である。

前々月より引續いて『眞の落語』の稿を草する筈であつたが餘り面白くもないものを立て續けに強ひるのも如何
 と存じ、わざと御遠慮の意味でこんなものを挿で見た、讀者及編輯者の御諒解を願ふ。（靜圃生）



住吉駕籠

五代目 笑福亭松鶴

此のお話も昔時申したことで、今日ではお断り申して置かぬと、大きにお分りにならぬと云ふこと
 が澤山ございます。今様に變られる話と變られぬ話とがございます。昔時のを其の儘演らねばならぬ
 話になると、當今は餘程世態が異つて居りまするが故に、ツイ話の能書のやうなことを申し上げねば
 なりません。

當今は便利の世の中で、電車が出來、又自動車或はバスが有り、住吉へ御參詣になりまするにも好
 いたものに召して、歩かずに行けるやうに交通機關が發達して居りますが、昔時は先づ歩かずに行か
 うと思ひますると、駕籠に乗るより他に仕様がござりませなんだ。當今駕籠に乗つて何う斯うと云ふ
 のは足の弱いお方が高野山へでも御參詣の時に山駕籠でお登山なさる、それとても現今はケイブルと